



特別
イ 4
3163
29(1)



貴
44
2163
29(1)

鈴木信成輯

貫之集類題

東都書林

青雲堂



この本の題名をいふと古きものなること事
たきいふはまらむと此書といふことし
のふともいふるべきものなることし
きんあれはよき世にふれぬことし
るのむむいふことし
といふるはむむいふことし
に―あれはよき世にふれぬことし

の撰にたうけりし一修雅素とゆひま
ゆりしりてあきぬれとされし、
ていさくうぬもあはるるとい
めてらまるし、修本伝成あ日まうてま
てらやうきく素といさくうぬと
見えぬのまよふり、
しと四季遊籍のしりちち
序一

ほりんりのあやしく、
こらまあむかひしく、
たまほいとあくと、
うらうらとく、
あよきりて、
せまうといふ、
しうま紀新自の人

凡例



○今世小傳とある紀の相伝の家は集には要意難の能も
いふは一やとふに文字の落る中このやまも類もなやえ
よとわさういけはあやゆんをよりいそむきおれ乃事由
わうこの又あり新類類ゆきわつあ母と死つて身わつと
おろきとけのこもえたしあはなん

○集中宿著はあからけりたもた歌の意と死つたも
たきとく類と死といふも他は歌の世にた書とみあ
りては又家集より他のあやまのり撰集より

紀貫之といふべきならんはそやあやゆるものうしひのふ
一二首をうたひ載せし

○のさかゝるれあなうぬも歌ははくまをまふふそむあうふ
ちさるふといひうくそえいせまもちりほこつふあひひめく
らせとも歌のふおもむ清くえいけし書紙をれんふん
しえいし勢ふあといふあくたゆいのま

○集中の歌二十一代集に見えて他の人此歌とせむらゆふ
集の名と替のいむとの名と書きうし

○原中の歌八百四十八首今古写本より補ふ歌九首二十一
貫之ロニ

代集の中よりとる歌百二十一首すて九百九十首あり
○おれあうしをほくあハ二十一代集の中より書加へる歌
又ほくうふあえうそあまの・此あうしをほ

天保十三年の秋

鈴木信成しるま

春部

年內立春

早春

早春龍

山霞

雨中鶯

梅

山家梅

紅梅

立春

早春霞

冰始解

野霞

若菜

雪中梅

名所梅

落梅

閑居立春

早春待鶯

子日

行路霞

春雪

水邊梅

梅花春久

柳

立春雪

早春鶯

山家子日

山家鶯

山殘雪

庭梅

折梅

水邊柳

花未飽	落花如雪	閑居花	霞隔花	折花	庭花	呼子鳥	春草
遲日	無風散花	依花待人	遠山花	花似雪	行路花	花	野春雨
野遊	深山落花	故鄉花	山家花	水邊花	花留人	初花	歸雁
桃花	落花多	庭落花	山家花遲	松間花	見花	栽花	羈中歸雁

山吹	池邊藤	春河	海邊暮春	惜春	夏部	立夏	卯花	行路郭公
水邊山吹	水邊藤	春田	暮春落花	三月盡	首夏郭公	首夏藤	待郭公	船中郭公
杜若	荒屋藤	春人事	暮春鶯	春雜	郭公	郭公	夜聞郭公	月前郭公
藤	春天象	暮春	暮春藤		更衣	里郭公		

旅宿聞郭公

五月郭公

菖蒲

五月五日

早苗

夏夜短

瞿麥

鵜河

照射

納涼

山納涼

夏被

夏雜

秋部

立秋

河邊立秋

萩告秋

早秋風

七夕

七夕糸

七夕衣

七夕祝

七夕後朝

萩

萩露

庭萩

野萩

社頭葛

女郎花

薄

蘭

朝顏

草花

庭草花

草露如玉

松虫

促織

蛸

鹿

秋田

小鷹狩

駒迎

月

十五夜月

月似雪

月夜客來

月夜彈琴

夜雲收盡月行遲

水邊月

山月

海上月

雁

初雁

霧中雁

夜雁

河霧

山霧

野霧

擣衣

待人擣衣

月下擣衣

荒屋擣衣

菊

栽菊

庭菊

折菊

菊露

水邊菊

月前菊

菊花盛久

菊延齡

紅葉

名所紅葉

杜紅葉

深山紅葉

水邊紅葉

瀧下紅葉

月前紅葉

雨中紅葉

霧中紅葉

紅葉厭風

暮秋

暮秋薄

暮秋鹿

暮秋月

暮秋河

九月盡

秋雜

冬部

初冬

時雨

時雨深山

落葉

山落葉

山路落葉

水邊落葉

雨中落葉

殘菊

初霜

河邊千鳥

細代

雪

竹雪

雪中松

雪似花

水上雪

山雪

山家雪

鷹將

早梅

佛名

佛名朝

歲暮

歲暮雪

惜歲暮

除夜

冬雜

子日

花をばさのうらみはるかに花をばさのうらみはるかに

久しき花のうらみはるかに花をばさのうらみはるかに

ふさふさの花のうらみはるかに花をばさのうらみはるかに

昔のうらみはるかに花をばさのうらみはるかに

續千春上

昔のうらみはるかに花をばさのうらみはるかに

山家子日

山家のうらみはるかに花をばさのうらみはるかに

山家のうらみはるかに花をばさのうらみはるかに

賈之二

山霞

山の霞ははるかに花をばさのうらみはるかに

野霞

野の霞ははるかに花をばさのうらみはるかに

行路霞

拾遺春上

行路の霞ははるかに花をばさのうらみはるかに

ちかひかくを替

山家のうらみはるかに花をばさのうらみはるかに

山家鶯

山家の鶯ははるかに花をばさのうらみはるかに

雨中鶯

雨中の鶯ははるかに花をばさのうらみはるかに

若菜

新古春上

若菜のうらみはるかに花をばさのうらみはるかに

折梅

梅は春のさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

梅のさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

風雅春上

またたきもほんとあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

ゆれおきておそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

古今冬

○梅のまはれ種おひるまらぬひせら種つとくははる人のまゝの種とて老くまらぬ

後撰春上三船恒

くまらぬおそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

新千春上清原元輔

おそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

落梅

梅は花もひびいて散らぬまらぬひるまらぬ

古今春上

○ふれおきておそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

新千春上中納言兼輔

またたきもほんとあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

ゆれおきておそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

くまらぬおそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

またたきもほんとあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

ゆれおきておそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

くまらぬおそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

またたきもほんとあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

ゆれおきておそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

くまらぬおそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

またたきもほんとあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

ゆれおきておそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

くまらぬおそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

またたきもほんとあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

ゆれおきておそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

くまらぬおそくもあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

またたきもほんとあひ物のむかしもさきりまははる人のまゝの種とて老くまらぬ

風雅春中

新千春上僧正遍昭

新千

花のよもひのき物よも柳のよもひのき物よも

水邊柳

あけあきの風も沈ぶま柳のいせはかたむく

春草

拾遺春

花へとれたるあまのつらうしつとを垣ひのあまのあまのあまの

まはつとつちのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

古今春上

野春雨

○我せころ衣たるあまのつらうしつとを垣ひのあまのあまのあまの

歸雁

まはつとつちのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

羈中歸雁

花のよもひのき物よも柳のよもひのき物よも

母貝之六

呼子鳥

いほりともいへんあまのつらうしつとを垣ひのあまのあまのあまの

花

百子香木つひちの梅花のよもひのき物よも

●人よもあまのつらうしつとを垣ひのあまのあまのあまのあまの

花のよもひのき物よも柳のよもひのき物よも

さうよりあまのつらうしつとを垣ひのあまのあまのあまのあまの

後撰春下拾遺雜

久しうもあまのつらうしつとを垣ひのあまのあまのあまのあまの

風雅春中

ふたふたのさくらさくらと春の桜をさくらさくらとよみかへし

桜よはくさくさのさくらさくらとよみかへし

いづれはさくらさくらとよみかへし

古今春上

○さくらさくらとよみかへし

同上

○あや柳はさくらさくらとよみかへし

後撰春下

○さくらさくらとよみかへし

新古今春下

○さくらさくらとよみかへし

初花

古今春上

○さくらさくらとよみかへし

栽花

ふたふたのさくらさくらとよみかへし

庭花

さくらさくらとよみかへし

あや柳はさくらさくらとよみかへし

行路花

さくらさくらとよみかへし

いづれはさくらさくらとよみかへし

花留人

いづれはさくらさくらとよみかへし

見花

風雅春中

ほろろぬ玉すてかきまてた様をうらたふあうけを

古今春上

折花

○誰しもとておつる昔ををわかれしうらたふあうけを

拾遺春

後

花似雪

横を折るの下風をうらたふあうけを

かなを色におもひ入の横を折るのうらたふあうけを

昔柳のきつかりて横を折るのうらたふあうけを

横を折るのうらたふあうけを

拾遺春

○昔柳のきつかりて横を折るのうらたふあうけを

水邊花

拾遺雜

きつかりて横を折るのうらたふあうけを

河を渡る花を折るのうらたふあうけを

ゆきを折るのうらたふあうけを

後撰春下

○朝やま下ゆきを折るのうらたふあうけを

松間花

ほろろむね松の間をうらたふあうけを

古今春下

○昔柳のきつかりて横を折るのうらたふあうけを

同上

○と柳のきつかりて横を折るのうらたふあうけを

霞隔花

遠山花

風雅春中

山花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

古今春上

梅の花咲けりも思ふの山花の心よりいふあはれなき

山家花

山家花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

山家花遅

山家花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

閑居花

閑居花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

依花待人

古今春下

依花待人の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

故郷花

故郷花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

風雅春中

故郷花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

拾遺春

故郷花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

故郷花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

拾遺春上

故郷花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

古今春下

故郷花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

後撰春下

故郷花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

續古春下

故郷花の心抱くはるる白雲をまはした様乃らんゆゑあけけり

かみとて 続古

花浪

花欲散

惜花

夕ぐせのあはれをよみて入横のあはれをよみてはかひなくあはれ

新續古春下

あはれとよとよのあはれあはれ横のあはれあはれあはれあはれ

あはれ

あはれのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

落花

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

古今春下

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

新古春下

あはれのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

賈之十

庭落花

落花如雪

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

後撰春下

無風散花

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

古今春下

深山落花

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

落花多

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

續千春下

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

花未飽

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

遅日

新古春上

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

拾遺雜

松風の物いんかあふんおまてたゆへもあふんはなはな

かこりなほ松水のひの浦せのまはなふあふんはな

うの海ぬるふ心もあふん物を松いんかあふんかあふん

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

新拾春下

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

續古春下

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

池邊藤

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

水邊藤

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

新後拾春下

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

後撰春下

あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

荒屋藤

人の好き宿小舟の波の吹風小舟を乱るる春の夜

春天象

○後撰春上 暮家柳引ふけり冬この月ばかりも花や咲く

春河

吹風小舟を乱るる春の夜新拾春上 吹風小舟を乱るる春の夜あゝね 新拾下同

○後撰春下 暮よりも暮へふかれの様に波の花をそるるあゝね

春田

○新勅春下 小田と今いづれも夜をぬかの風小舟を乱るる

あゝ小田と今いづれも夜をぬかの風小舟を乱るる

春人事

と雲の山の櫻はさくらをそるる方人とたねもや

暮春

○いづれも 櫻サイはさくらをそるる方人とたねもや

● 櫻も死なずさくらに今いづれもそるる方人とたねもや

あゝゆめはついでにわかれの春の夜をそるる方人とたねもや

○拾遺 花も又もおぬる春の夜をそるる方人とたねもや

○後撰春下 いづれもあゝねをそるる方人とたねもや

海邊暮春

浦へ小舟いづれも波の吹風小舟を乱るる春の夜

暮春落花

吹風小舟の浪のよる春の夜をそるる方人とたねもや

三月盡

後撰春下

又もよむ時をいかにたのまれぬ春のゆくもさりとて春の喜も

風雅春下

ゆく春のゆくもさりとて春の喜も

よん年のたれはうらひぬる春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

よん年のたれはうらひぬる春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

古写本

よん年のたれはうらひぬる春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

春 雜

よん年のたれはうらひぬる春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

● 春のゆくもさりとて春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

貫之十五

古今春下

○ 春のゆくもさりとて春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

新勅春上

梅のゆくもさりとて春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

よん年のたれはうらひぬる春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

古今春上

よん年のたれはうらひぬる春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

古写本

よん年のたれはうらひぬる春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

よん年のたれはうらひぬる春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

同上

よん年のたれはうらひぬる春の喜もいかにたのまれぬ春のゆくも

古今春上

○何のさうまは山を越えぬもそのあはれをそぞろに

同上

○梅の花とくさぬもかほをたぐひて風を吹けりぬ

後撰雜三

○かへり来る鳥をよそよそはくもさかむらうふさあまの御歌

同集春中

○ゆりぬくといれよひそまぬれあふやむかしのなほけり

拾遺雜春

○なつと風を吹けりて時ハ波のさへくちりけり

後撰春下

○あふふふいとのなほあふふふあふふふあふふふあふふ

夏部

立夏

花ももみすけのひんこうをむれぬのさふけの夏はなほ

首夏郭公

ゆきよの月日はさきもつるもなほあふふふを夏はまじ

首夏藤

さくらんぼのなれもあふふふあふふふあふふふあふふ

更衣

夏衣あはれあふふふあふふふあふふふあふふあふふ

卯花

さくらんぼのなれもあふふふあふふふあふふふあふふ

待郭公

あふふふあふふふあふふふあふふふあふふふあふふ

續古今夏

ちくさきそひらのむね月影ふ山をこすはるゆりまん

夏夜をもちていづり時をこしをむしを待つらうりつれ

風のそよぶぬきぬきをぬきぬきかたぬきぬきぬき

拾遺夏

○山はいふふふふふふふふふふふふふふふふふ

郭公

はらうふゆふふふふふふふふふふふふふふふふ

後撰夏詠人不知

けいふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

年とふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ゆらあひ

無月之十七

里郭公

拾遺夏

けいふふふふふふふふふふふふふふふふふ

つゆに

行路郭公

古寫本

りふふふふふふふふふふふふふふふふふ

たまふふふふふふふふふふふふふふふふふ

拾遺夏

かふふふふふふふふふふふふふふふふふ

舟中郭公

風雅夏

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

夜聞郭公

古今夏

○ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

新拾夏

月夜ふふふふふふふふふふふふふふふふ

月前郭公

旅宿聞郭公

山里小旅宿よふせし時多し
丁亥夜を多くと長居をぬぐ

五月郭公

時多しなり。夜をさあへるるは
宿をさへて夜をさへて

は月をたも知れぬと時多しなり
夜はさへて夜をさへて

時多し木をさへて時多し
世のほのきくまのけり

名のはまのたもいせし
時多しなり。夜はさへて

新勅夏

時多し夜をさへて
夜をさへて夜をさへて

菖蒲

深き水はさへて
深き水はさへて

貫之十八

あやめ草は花をさへて
深き水はさへて

は月をたも知れぬと時多し
夜はさへて夜をさへて

五月五日

續古夏

あやめ草は花をさへて
深き水はさへて

は月をたも知れぬと時多し
夜はさへて夜をさへて

あやめ草は花をさへて
深き水はさへて

續古夏

あやめ草は花をさへて
深き水はさへて

早苗

夏夜短

古今夏

と雲の山田を種で稲妻のともも小様をえりんとそよぶ

。夏の夜はよすのともよれの時をさく一筋にゆく流るる光

瞿麥

拾遺雜

昔夏の花をいふれりおとてとほ月日の教もかまは

かゝる村あまの宿されぬ花とてとほまの夜を種でそよれ

かろけふふと夜をものまの様もかてはとほ昔夏の花

鵜河

玉葉夏

かゝる大の教もかてはとほ月日の教もかまは

かゝる村あまの宿されぬ花とてとほまの夜を種でそよれ

照射

拾遺夏

はつと山本は下をたもたぬ大の夜を種でそよれ

納涼

夏の夜を種でそよれとほ月日の教もかまは

かゝる大の教もかてはとほ月日の教もかまは

山納涼

拾遺夏

夏の夜を種でそよれとほ月日の教もかまは

夏夜

新古夏

夏の夜を種でそよれとほ月日の教もかまは

かゝる大の教もかてはとほ月日の教もかまは

かゝる村あまの宿されぬ花とてとほまの夜を種でそよれ

七夕祝

七夕後朝

一と珍小一夜上人織女あひむ妹れきりぬたうお
新古秋上
織女い今やりの終る海かきうとあてふる好なり

それらの身小びとひつたふの人をて後れをうひるける
後撰秋上拾遺秋上

船やあけてなるあやすん織女いらるぬ別のを紙きく

萩

かあ枝ふさいさけまと萩萩の下葉いり死んふとそやあ

葉のふたあまきこふぬれと人志は萩のふ葉そあふれる

萩露

續古秋下 風雅秋上 秀 続古

杖さきこ小机さきぬいさう萩の露よりおの萩露ありけり

庭萩

野萩

ほまをる萩の露や杖を死の下葉のそおあてぬん

● 杖ぶのいえさ物ぞ杖を死の下葉は萩の萩ゆきさうあ

と先葉のさうはゆあふ萩萩の萩に萩ゆ知ささうけり

萩の萩の萩れゆきや萩萩なほしうの萩さうあうけり

後撰秋中

○ りのりうさうてあひむ萩あく萩をもちあさき萩の萩萩

古今秋下

○ あま萩萩のいさうにさふ萩ゆ萩ゆあ人萩の萩ひさけり

拾遺秋

かりふと萩萩の萩とあ萩あさうふんそれひの死ぬる

女郎花

社頭葛

よみしへうしつゆかふふある時かひふれしそ人らみえを

拾遺秋

かりふれし人のえあきあき花の枝をまけうりけあ

新拾秋上

きよむ白ひ衣袖あうはくらのあかきあて人あきあ

古今秋上

。あき秋ふくぬあゆあきあきあをきあてあきあ

後撰秋中

。白ゆの衣かきあきあきあきあきあきあきあきあ

同上

。あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

同上又新勅秋上詠人不知

。あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

薄

。あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

。あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

。あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

。あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

拾遺秋上

。あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

古今秋上

。あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

。あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

蘭

朝顔

ての月夜をききしはうらやまをいかにかかへてはるる

大空にわすれぬ月影の光る時ありてはるるあり

ゆりしけりきりしるある月影をぬきてはるるをききし

ての月夜をききしはるる月影をぬきてはるるをききし

○照月の光る影をぬきてはるる月影をぬきてはるる

十五夜月

百とせのちこれ月影をぬきてはるる月影をぬきてはるる

貫之廿六

月とふあやまれもよ夜影の光る月影をぬきてはるる

么方れてはるる月影をぬきてはるる月影をぬきてはるる

月似雲

○夜多の空もよ月影の光る月影をぬきてはるる

かひなれはるる月影の光る月影をぬきてはるる

月夜弾琴

●月影をききしはるる月影をぬきてはるる月影をぬきてはるる

夜雲收盡
月行遲

五葉秋下

て雲れこもりとも見えぬおのり月影のときけりけり

三三三

水邊月

さよふれもいれもあつぬ月影の水底ふきまよふあつるか

ゆゑ水れんもいれもあつぬ月影の水底ふきまよふあつるか

古今雜上

あひあせり

ゆゑ水れんもいれもあつぬ月影の水底ふきまよふあつるか

月影のさあふつはそあせとあまのそあせもいれもあつるか

拾遺雜上

山の端拾

あまのそあせもいれもあつぬ月影の水底ふきまよふあつるか

山月

あまのそあせもいれもあつぬ月影の水底ふきまよふあつるか

貫之廿七

海上月

後撰羈旅

いとくさふもからぬ昔月れまほけの月の影候てまて

波一

波一

そり

雁

新拾雜上

の新拾下同

りる

うゑし神はもむあくに株の田を存す杯を人を唱ふるあは

はふはへそめりつるつるあはの目と田がりふ今そ唱あ

かり海を望むた魚ふり株風ふりさ田存すあもあ

あまのそあせもいれもあつぬ月影の水底ふきまよふあつるか

初雁

あまのそあせもいれもあつぬ月影の水底ふきまよふあつるか

風雅秋下 おきり

わくまねの深まらせるもこれ葉のついでにのこころん

う風下同 ゆきあきん

古今秋下

○ 林の葉白くかきつらきとてんむよりさねとわくぬらふ

栽菊

新古賀

柿てんる葉のふきつる世まに人れきく言さるなうけ

いのみつかなは昔月のほくは葉つり色の輝さうあてん

古今秋下

○ 咲をきく菊かきつらきとてんむよりさねとわくぬらふ

庭菊

おきり

葉のむ柿る宿れあやまらかいつらふとわくぬらふ

折菊

おきり

あつた葉とてまらふあつた世れあつたをんをぬらふ

賈之廿九

菊露

後拾秋 清原元輔

一枝の葉とてつらふつらきとてんむよりさねとわくぬらふ

らびつらつらきとてんむよりさねとわくぬらふ

百とせぬ人ふらむる葉あつたあつたをんをぬらふ

けいふふらむる葉あつたあつたをんをぬらふ

徳をよりぬらふつらきとてんむよりさねとわくぬらふ

ふらむらつらきとてんむよりさねとわくぬらふ

新後拾秋下

○ 葉とてつらつらきとてんむよりさねとわくぬらふ

水邊菊

水よさへ流てふらきき都宿の葉の淵とそ取ぬへくわる
葉のむ老ほくむあそひり水の流きん張流る知らん
きこれ葉のゆめあはれなれさきく水波なくく流るけり
水よさへ流てふらききと葉のむらけりかけの流きまけり
葉のそれひもてなる流る水にさへ波のきと流る宿よきりたる

月前菊

新拾秋下

いづれもさきくむらむ月のみるれ月よ流るる白菊
と流る物あはれも月影のころのきき宿はきき葉はきき

菊花盛久

咲はるる葉よの水もたうと秋と枯あつてそ白くくをれ
うはるるくかたうきうけり葉のむあはれききや咲らん

續後撰秋下

。うらうらとるるあつてのうらうらとるる花をたうきりけり

菊延齡

咲かまの葉よてはくぬる葉のむらうへもあ世の齡のくえん
又れ人のかりたてむらう葉の百年をたうききにきりけり

紅葉

續後撰秋下

あまのゆめあはれのゆめあはれのゆめあはれのゆめあはれ
あまのゆめあはれをききりてはれりてはれりてはれり

あまのゆめあはれ 續後

紅の葉も秋の風もあつたよ

新千秋下

紅の葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

古今秋下

名所紅葉

古今秋下

○ 秋風の吹く日より赤い葉もあつたよ

後撰秋下

○ 赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

同上

○ 赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

同上

○ 赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

同上

○ 赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

同上

○ 赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

同上

○ 赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

杜紅葉

赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

深山紅葉

古今秋下

○ 赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

續千秋下

○ 赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

水邊紅葉

赤い葉もあつたよとゆふの風もあつたよ

山を死水にうつりてゆく水もぬき去らんとせられたるれま

滝下紅葉

吹風もあぬふかのふりもあぬふたうたうたうたうたうたうた

拾遺冬

流るるのともあふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

新拾冬

山をこも梢はうけてあつれづる滝もあつれづるあつれづるあ

後撰秋中

月前紅葉

。輝れ月がうらさあけそのあもあもあもあもあもあもあもあ

拾遺冬

くもの拾遺

雨中紅葉

。是頃の心も死にじ時ぬれくもくもくもくもくもくもくもくも

同集秋

霧中紅葉

。若ぬくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも

後撰秋下

。輝れ霧はくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

拾遺秋

紅葉厭風

。心もあぬふんくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

暮 秋

。のこもあぬふんくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

。のこもあぬふんくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

。のこもあぬふんくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

法イ

。のこもあぬふんくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

古今秋下

暮 秋 鹿

。夕月夜をくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

暮 秋 薄

。のこもあぬふんくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

暮秋月

後撰秋下

○長月のあけ月あけのあけはるけり秋はあけのあけ

暮秋河

古今秋下

そこのあけのあけ秋はあけのあけ河はあけのあけ

○あけのあけのあけ秋はあけのあけ河はあけのあけ

九月盡

あけの本あけのあけ秋はあけのあけ

あけのあけのあけ秋はあけのあけ

秋 雜

新續古今秋下

あけのあけのあけ秋はあけのあけ

あけのあけのあけ秋はあけのあけ

貫之卅三

あけのあけのあけ秋はあけのあけ

あけのあけのあけ秋はあけのあけ

あけのあけのあけ秋はあけのあけ

あけのあけのあけ秋はあけのあけ

同集秋

○秋のあけのあけ秋はあけのあけ

古今秋下

あけのあけのあけ秋はあけのあけ

山落葉

玉葉雜三
。色る山れ葉のふ葉由敷にさうけりたれあのをさよあふふ

風雅冬

山路落葉

のこも葉の敷く時いろふみ路ふりそぬ山落なりは葉

新拾秋上

水邊落葉

のこも葉の敷く時いろふみ路ふりそぬ山落なりは葉

ふ葉ちる木のくみ残る時いろふみ路ふりそぬ山落なりは葉

うたえゆふ葉の敷く時いろふみ路ふりそぬ山落なりは葉

白波の敷く時いろふみ路ふりそぬ山落なりは葉

物こひの敷く時いろふみ路ふりそぬ山落なりは葉

雨中落葉

ふなれと時いろふみ路ふりそぬ山落なりは葉

残菊

残さけり菊よあわれと秋首をくれそ花のいろを深けふ

おこも葉の敷く時いろふみ路ふりそぬ山落なりは葉

初霜

花のいろを深けふと秋首をくれそ花のいろを深けふ

拾遺冬

河邊千鳥

おのひろ孫妹うりゆけそ冬夜の風をそよまふあふ

新拾冬

細代

おのひろ孫妹うりゆけそ冬夜の風をそよまふあふ

ふは残るも葉をそよまふあふと秋首をくれそ花のいろを深けふ

のこもる雪をたれておるなりよる白波のよりの目を見せしむ

と紙よして木の葉の白波のよれとあゝぬ細代あつげ

山風れいこ吹おちたわらよる白波を人そより替りけふ

みよし世のよし世の海にわらよる滝のみまのよき花つりのる

拾遺冬 後撰冬よと人志す
おちのちよる白波を人そより替りけふ
おちのちよる白波

雪のよきはうと吹おちたわらよる白波を人そより替りけふ

竹 雪

風雅冬

みよし世のよし世の海にわらよる滝のみまのよき花つりのる

雪 中 松

拾遺賀

白雪の海にわらよる白波のよれとあゝぬ細代あつげ

松の枝小ゆりよる雪の海にわらよる滝のみまのよき花つりのる

世の中久し世の海にわらよる白波のよれとあゝぬ細代あつげ

白妙に雪の海にわらよる白波のよれとあゝぬ細代あつげ

松のえ小ゆりよる雪の海にわらよる滝のみまのよき花つりのる

雪のよきはうと吹おちたわらよる白波を人そより替りけふ

古今賀 拾遺冬

白雪の海にわらよる白波のよれとあゝぬ細代あつげ

雪 似 花

木れより風小まうせて降る紋書あまては花とそ見る

いと人たけを免らん降るのむと花とそあまては花とそ見る

茶の本もい
あま木小とそあまてより降るや書あまては花とそあまて

古今冬

○冬あまよりあまひうけぬ紋木れよりむとあまて書と降る

同上

○雪ふまは冬あまのむるあまの本もあまては花とそあまて

風雅冬

あまて小降るむかきもあまて水より色も降らまりけり

玉葉冬
藤玉下同

とてあまのほえつるあまは雪の山よりあまそより降りけり

貫之卅七

水上雪

山雪

山家雪

新古今冬

あまては雪ぬくあまの山に雪もあまては花とそあまて

の雪とそあまて新古今

鷹狩

あまてのあまてせうとあまのあまては花とそあまて

の雪とそあまて

あまてのあまてせうとあまのあまては花とそあまて

あまてのあまてせうとあまのあまては花とそあまて

あまてのあまてせうとあまのあまては花とそあまて

風雅冬

あまてのあまてせうとあまのあまては花とそあまて

拾遺雜

あまてのあまてせうとあまのあまては花とそあまて

早梅

同上
梅もみよまきをりて雲の城まのつゆもきたるあやめ

佛名

拾遺冬
年たうち小流のまを飛らたぐり 降志の香とこも小清あ

佛名朝

君さうらふ山ふかへてをこふ雪かこふてわらよとをあひ

歳暮

玉葉冬
ゆい月日海は水ふもわらわにあらねるこもいぬふ年うら

歳暮雪

新勅冬
ゆらうち雪をにぬかこをま向ふるまのさうひの年の城とは

まをこむとわらわのこわらわの梢ふ雪を降かすけふ

玉葉春下
まあわのくぬぬるまをたふさふまのゆくとをあひらひる

貫之卅八

後拾遺冬 清原元輔まろく 後拾下回

まね宿ふあはれまのこを城はまにまこく 城ぬるれまのこを

まよとらるるあはれ今くも降まのまをまをまのまにのつゆこを

りちまのたまをまのあひけまのまのまにのまのまをまのまを

あつ山のまをまをまをぬのまのまをまをまをまのまをまを

古今冬

惜歳暮
ゆい年の切こもあつまのまを境をまをまをまをまを

玉葉冬

まのまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを

除夜
まのまをまをまをまをまをまをまをまをまを

冬
雜

新古雜下

疑波如衣海すそりてうきまはけりてお目を好き

せとたふもはあまなる宿るれりてかたえんるふあり

梅はまおほる里ふくひすれをとりてまを待らん



冊之卅九

